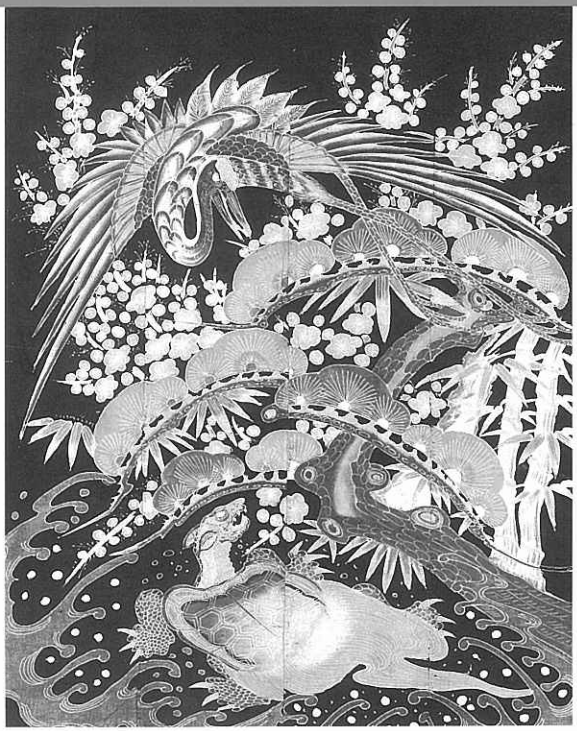


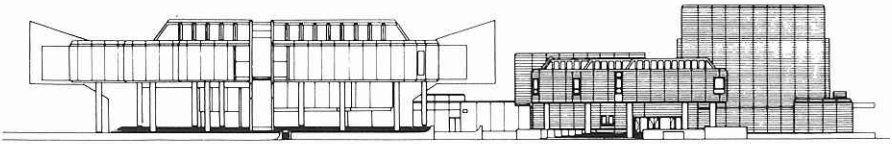
筒描き布団表　松竹梅に鶴亀文　明治時代

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM・SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

1 July 1994

No. 106



常設展安内

昆虫の擬態

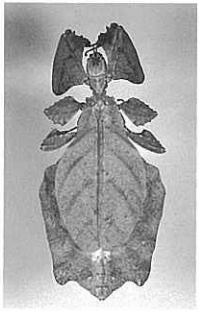
―だましのテクニック―

会期：7月15日(金)～8月28日(日)

昆虫類の種類数は、地球上の全動物の種類数の実に4分の3を占めるほど、多様性に富んでいます。昆虫類の多くは、常に鳥などの他の動物から捕食される危険性にさらされながら生活しています。しかし、彼らの中には厳しい自然界の中で、より確実に生き残るために、「擬態」と呼ばれるデザインを、自らの体に施しているものがいます。

中には「何もそこまで徹底しなくても…」と思えるほど、凝ったものも見られます。今回の常設展では、昆虫類に見られる擬態をテーマに展示をしました。その一部を御紹介します。

1　カムフラージュ（隠れる）



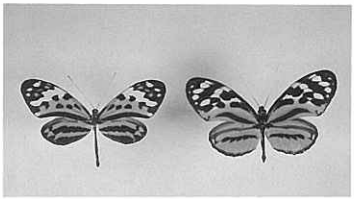
天敵から身を守る手段として、誰もが最初に思いつくのは隠れることです。

写真は、より確実に生き延びるための手段として、「カムフラージュ」によって自分の姿を隠すことを選択した、コノハムシの仲間のオオコノハムシ（ナナフシ目コノハムシ科）です（マレーシア産）。

コノハムシとは木の葉虫の意味で、背中にある葉脈そっくりの模様など、まさに進化の極致ともいえる姿をしています。木の葉につかまって生活していますが、木の葉の色や模様が多種多様であるように、オオコノハムシの体にも同じ種類でありながら、1個体ごとに色や模様の違いがあり、なかなか芸が細かいようです。

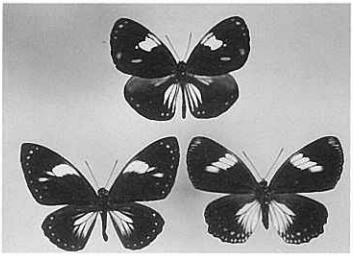
2　警戒色と相互擬態（色で警告する）

この2種類のチョウはそっくりに見えますが、実は別種です。それでもよく似ているので近縁種ではないか、と思われるかもしれませんが、左はイスミアキオビマダラ(マダラチョウ科)、右はキマダラカバイロドクチョウ（タテハチョウ科）で、それぞれ別の科に属するチョウです（いずれも南米産)。それぞれ幼虫のときに毒を持つ植物を食べて成長し、その毒を体に蓄えて成虫になるので毒チョウと呼ばれます。



毒チョウを食べた鳥はひどく苦しむため、二度と毒チョウを食べなくなります。このとき毒チョウの羽の色が派手なほど、鳥の記憶に残りやすいため、毒チョウはコントラストの強い目立つ色を身につけていることが多いのです。この2種類のチョウはオレンジ（黄）色と黒を用いていますが、これらは人間社会でも交通標識に用いられている色です。このような模様を「警戒色」、天敵に対する警告の機会を増やすために、互いに警戒色を似せあうことを「相互擬態」といいます。

3　模倣擬態（だます）



毒チョウの警戒色を一流ブランドとすれば、これをまねる偽ブランドもいます。姿だけ毒チョウに似せて身を守る作戦で、これを「模倣擬態」といいます。

この写真の3種類のチョウ（いずれも東南アジ

ア産）のうち、本物の毒チョウは上のシロモンルリマダラ（マダラチョウ科）のみ。下の左側はムラサキマネシアゲハの白紋型（アゲハチョウ科）、右側はエグリゴマダラ（タテハチョウ科）で、いずれも毒を持たないチョウです。

ムラサキマネシアゲハには、写真の白紋を持つ型のほかに前羽が紫色に光る紫色型もあり、こちらは別の毒チョウのルリマダラ(マダラチョウ科)の仲間に擬態しているので驚いてしまいます。

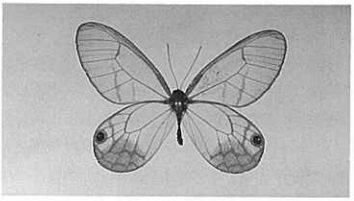
4　威嚇（大きな目玉で驚かす）

小型鳥類は、大きな目玉模様を恐れることが知られており、このことは実験でも確かめられています。昆虫類を捕食する小型鳥類も、フクロウなどの猛禽類やヘビなどの大型動物には、逆に捕食される立場にあります。このため小型鳥類は、大型動物の目玉に見える模様を恐れるのでしょう。

さて、写真はアオネフクロウチョウ（南米産）の羽の裏面を上下逆さまに示したものです。フクロウチョウの名前の由来がおわかりいただけると思います。フクロウチョウは、フクロウに擬態して天敵の小型鳥類を「威嚇」し、身を守っていると考えられてきました。

ところが、実際に自然の中でフクロウチョウがこのような格好で静止していることはなく、フクロウに擬態して身を守るという推理は、どうやら人間の考え過ぎだったようです。しかし、大きな目玉模様だけでも威嚇効果はあるので、フクロウチョウの持つ目玉模様が、生存上有利に働いていることは十分に考えられます。

5　そらし紋（天敵の攻撃をそらす）



大きな目玉模様は鳥が嫌いますが、逆に小さな目玉模様を身につけ、鳥の攻撃をそこにそらす工夫をしているチョウがいます。そのひとつが写真のベニスカシジャノメ（南米産）で、主としてアマゾン川流域に分布しています。

写真では分かりにくいかもしれませんが、スカシジャノメの仲間は羽の大部分が透き通っていて、後ろ羽の一部に目立つ色（本種は赤）と小さな目玉模様を持っています。このチョウは暗いジャングルの中で生活し、透き通った羽が周囲にきれいにとけ込んで、後ろ羽の赤色だけが目立ちます。その光景は息をのむほど美しいと言われます。

鳥は小さな目玉模様を、昆虫の急所である目と認識するらしく、このよく目立つ赤色の部分とそれに隣接した小さな目玉をくちばしで攻撃するのです。ところがその部分は体の中心から遠い位置にあり、食いちぎられても生存上問題がないのです。このように鳥の攻撃をそらす役割を持つ模様を、「そらし紋」と言います。

しかし、虫たちが考え出した生き延びるためのせっかくの工夫も、人間にとっては興味・収集の対象となるのですから、昆虫類にとって一番たちの悪い天敵は人間かもしれません。

ところで、今回御紹介した昆虫類はすべて熱帯に分布するものです。なぜ擬態は熱帯で多く見られるのでしょうか。それは、熱帯では生物の種類数、個体数が多い上、天敵による淘汰圧が大きく、1世代あたりの生活史も短いので、「食う－食われる」の関係がより深刻に生物の生存戦略に影響を及ぼしているためであるからと考えられます。

（学芸員　中原正登）

常設展案内

はれの日の色　筒（つつ）描（が）き

会期：7月15日(金)～8月28日(日)

染色の「筒描き」を知っていますか。

綿の布をキャンバスにして、柿渋をひいた和紙「渋紙（しぶかみ）」を円錐形の袋状にして口金をつけた筒（つつ）に、もち粉や米ぬかの糊を入れて絞りだす、デコレーションケーキに“Happy Birthday”と書くようなものです。この染めの技法は、絞りだした糊で描いた部分が白く残るので「糊置防染（のりおきぼうせん）」の一つです。家紋や名前に糊置きした布を藍甕にひたした藍地に白抜き、あるいは赤地や抹茶色地、茶色地に白抜きのシンプルな風呂敷や旗をなどを見たことはあるでしょう？これも身近なところで染められ、使われている筒描きの仲間です。数多く染める時には、手描きでなく型紙（かたがみ）を使って紋や模様に糊を置く、これも同じ「糊置防染」ですが、型紙使いは版を重ねることのできる版画、手描きを大切にする筒描きは一点制作の絵画のようなものでしょうか。

また、初節句の幟（のぼり）や大漁旗のように極彩色の大物、色のある筒描きの印象は強烈です。白抜きの部分に、「色挿し（いろさし）」といって刷毛や筆で染料（顔料）を摺り込むように布の表に描き染めます。京都の「友禅染(ゆうぜんぞめ)」は、こうした筒描き技法が高度に完成されて生まれたものです。

筒描きの歴史は比較的新しく、江戸時代初期の「茶屋染（ちゃやぞめ）」にその跡を残しながら途絶えてしまい、その後江戸時代の中期に、一方では繊細な「友禅染」が花開き、他方では木綿の普及とともに全国各地で庶民の染色筒描きが根づいていきました。佐賀でも土地の「紺屋（こうや＝染物屋）」に自慢の下絵が残っているとか。九州でも、筑後、八女、肥後とそれぞれに形や図案にスタイルがあるといいます。

しかし、庶民の布「筒描き」が「美」の仲間入りをしたのはおよそ五十年ほど前のこと。生活の中に「用の美」を見いだそうとする民芸運動家たちが、稚拙ながらもエネルギッシュな力にあふれた「筒描き」を発見してからのことです。

婚礼夜具や夜着、タンスをおおう油箪(ゆたん)や前述の風呂敷や幟(のぼり)、暮のほか地方色豊かな様々な形があります。日常生活の中の特別な儀式、年中行事、神社の祭礼や婚礼などの場を飾る色鮮やかな「はれの日の色」筒描き、そこにこめられた人々の祈りや夢が時と空間を越えて、現代人の心にも強く響いてくるようです。

描かれるのは「松竹梅」や「鶴亀」、「高砂」、「扇」、「桐に鳳凰」、「唐獅子に牡丹」、「鷹」、「茶道具尽くし」(写真)、「宝尽くし」や「熨斗」、「宝珠」など、祝いのよろこびにあふれた吉祥文様の数々。多彩な色にあふれたデザインあり、きりりとひきしまった藍の濃淡あり。流麗な筆でみごたえのある大作があれば、いかにも素朴で野太い筆の愛嬌ある一作もある。筒描きの面白さ、楽しさは、誰が見ても一目瞭然、庶民の「はれの日」は開放的な明るさでいっぱいです。

ここで紹介する筒描きは、宮原としえ氏収集のコレクションから婚礼夜具（布団や夜着）や婚礼風呂敷を中心に選び、ご助言のもとに展示したものです。

（学芸員　宮原香苗）

常設展案内

絵馬にみる農具

会期：5月27日(金)～8月28日(日)

佐賀平野でかつて用いられた農具を対象に、その農具が用いられた理由や形の有効性を探っていくことで当時の農業事情や佐賀平野の成り立ちまでが浮かび上がってくる。つまり農具とは、使用された地域によって様々な種類や形があり、その土地固有のスタイルを持っていることを意味している。

そもそも佐賀平野のほとんどは、有明海の沖積地が干陸化することによって造成されたいわば干拓地であり、特に江戸時代、佐賀藩の年貢増収政策と関わりながら農地造成としての干拓事業が積極的に進められた。こうした佐賀平野の成立過程を背景に考えれば、必然的に土壌は重粘土質であることをまぬがれず、農業用水はクリーク（堀）を水田の側方に設けることで、まかなうしかなかった事情が理解されてくる。佐賀は山が浅く、河川の流量が豊富でないため、もともと水田用水が絶対的に不足していた。そこへ干拓による耕地化が進み、水不足はさらに深刻な問題となっていった。さらに佐賀平野の河川は、有明海の満潮時には潮水が逆流し、そのままでは水田用水として利用できないという事情がある。このように、佐賀平野における水利は特に大きな問題をはらんでいて、その打開策として現れたのがクリーク（堀）だった。つまり佐賀農業の特徴が、耕地の土壌的問題と水田への給水方法といった深刻なる２つの事情をもって語られるのは、そのためである。

「絵馬にみる農具」展会場
四季耕作図絵馬の前方には、佐賀平野特有の農具が並ぶ。（長床犂、ゴミクイオケなど）

まず、土壌が重粘土質であることによる農具への影響を考えたとき、それが顕著に形として現れているものに鍬と犂がある。鍬は刃部が長く、柄が比較的短く、刃部と柄の角度が小さいという構造上の特徴があり、刃を突き刺し重粘土質の耕盤を反転させるのに都合のよい形状となっている。関東地方の軽い火山灰土壌において用いられる、刃部が短く、柄が比較的長く、刃部と柄の角度が90度近く開いている鍬とは全く対象的である。一方、犂は本体の下に長い床を持つ長床犂が用いられた。深耕はできないものの、長い床が耕土に密着しスムーズな耕起・反転が可能であった。これが山間部で用いられた深耕を目的とする無床・短床の犂だとそうはいかない。重粘土質の耕盤に犂先が突き刺さり、とても耕すことはできないのである。

次に、農業用水をクリーク(堀)からの供給に頼らざるを得なかったことが、農具にどう反映されたのであろうか。たとえば乾田ではなく、あえて水田（冠水した田）において用いられた水田犂は、その影響下に生まれた最たるものと考えてよい。長床犂の一種で、幅の広い床を特徴とし、耕すことよりも耕盤を締め固めることを主な目的としたこの農具は、代掻きの際、漏水を防ぐために用いられたものである。その背景には、釣桶や踏車(水車)によるクリーク(堀)からの過酷な揚水作業があったわけで、河川やため池から用水路を通して水を引く自然灌漑とは、全く事情が異なっていた。

今回の展示は、佐賀県内で確認されている２面の四季農耕図絵馬を通して、そこに描かれた農具を『管内農具図』[注1]（復刻本）と実物資料によって紹介している。佐賀特有の形を持つこれらの農具には、その一つ一つに佐賀特有の意味があることは上述の通りである。　（学芸員　山崎和文）

注１『管内農具図』

明治13年の調査に基づき、現在の佐賀・長崎両県の農具が図解で紹介されているもので、原本は長崎県総合農林試験場に所蔵されている。

資料紹介

黒田清輝　書簡（久米桂一郎宛）

差出　相州逗子養神亭　黒田清輝　三月十一日
消印　「相模葉山　三十一年三月十一日」
宛名　東京京橋区南鍋町一丁目一番地
　　久米桂一郎殿　親展
寸法　縦　16.1 cm　　横　131.0 cm

本資料は、佐賀市内のデパートにおいて開かれた「古書籍展示即売会」(平成5年10月6日～11日)に出品され、その後本書簡の内容が、明治美術学会誌『近代画説』第2号（平成5年12月）に上記出品目録抄から転載された。

当館は平成5年度本資料を収蔵した。これを機会に、本書簡について解読をあらたに試み、資料の紹介をかねて以下略述する。

本書簡は日本近代美術史上の大スキャンダル、すなわち東京美術学校長岡倉覚三（天心）排斥を狙いとした「美校騒動」の渦中にあって、黒田清輝の心底を窺い知ることができる希少な資料である。「美校騒動」そのものは、図案科主任教授であった福地復一（明治30年4月辞職）と、明治美術会の美術家を中心に、かって明治美術会が「鬼退治」と称してまで反発した九鬼隆一が連動し、天心の追い落としをはかった出来事であった。本書簡において、これまであまり強調されなかった林忠正が大きくかかわっていたことが予想され、そこから年譜にみるように、万国博覧会の組織づくりとの関係が浮び上がってくる。しかし、そうした騒動の只中にあっても、書簡にみえるように黒田の制作意欲は旺盛で、この年の夏、栃木県日光で《昔語り》を完成させる。

なお、文中、ヂャープル（九鬼隆一）、殿（岡倉覚三）、林（忠正）、安仲（安藤仲太郎）、大村（西崖）、浅井（忠）、小山（正太郎）、松井（昇）、長沼（守敬）である。また、森鷗外の「明治三十一年日記」中の三月十二日「西、久米、岩村、大村来り訪ふ」の記述は、本書簡中「大村ニ序ニ聞て見ろ」を受けたものとおもわれ、とりわけ事件の息遣いを感じさせる一文である。

関係年譜

1896年（明治29）
7月8日　東京美術学校に西洋画科設置（黒田清輝、久米桂一郎らに授業を嘱託）。
9月10日　黒田、久米ら明治美術会退会。
10月7日～11月29日　白馬会第1回展、上野公園旧博覧会跡第5号館で開催。

1897年（明治30）
4月10日～5月25日　明治美術会第8回展開催。
10月28日～12月5日　白馬会第2回展開催。

1898年（明治31）
2月28日　曾禰荒助、九鬼隆一に代わり1900年パリ万国博覧会副総裁に就任。
3月3日　林忠正、1900年パリ万国博覧会臨時博覧会事務官長に就任。
3月18日　「美術教育に就ての私見」（読売新聞）
3月21日　「美術界波瀾の真相」（読売新聞）
同　日　岡倉誹謗の怪文書（築地警醒会差出）配布。
3月25日～5月30日　明治美術会創立10年紀年展開催。
3月22日　岡倉覚三、帝国博物館理事兼美術部長辞任。
3月29日　岡倉覚三、東京美術学校長辞任。
4月28日　黒田清輝、東京美術学校教授となる。
7月11日　浅井忠、長沼守敬、東京美術学校教授となる。
10月5日～11月20日　白馬会第3回展開催。

（企画普及係長　松本誠一）

書簡本文

・文中の斜線は原本の改行をしめす。
・網かけ部分は原本の消去部分をしめす。

十日の夜の手紙今届い／たオレが昨夜出したのハ／今晩手前の手ニ入る／だろう　博覧会から／ヂャーブルを出して仕舞／つて其勢で博物館と／美術学校へ攻めかけた／ものと見へる面白い騒き／ニ為りかゝつて来たがさて／今度ハ博覧会征伐の／様ニたやすい譯ニハ行く／まいと思ハれる何しろ／攻手の総大将ハ林だ／Diableの考と望ハ大抵聞／て居る今度殿にも逢／つたが殿ハ一向平氣な風／をして居る併し今の様子／で一當けんのんなのハ殿の／位置らしい　オレなんか／位置の上から云ヘバ先づ殿／の手下見た様なもの（旧派から見れバ）／だから林など事ニよつたら／殿の落城と云暁ニハ共ニ／死刑ニ處せられると云次第／ニ為るかも知れないのだ併し／どう考て見ても明治美／術會の奴等の口先計の／野郎共ニ我れ々々丈の仕事ハ／出来ない事ハ明かだから林／と云ものがどうなろうが高／見で見物平氣なもの／だ　兎も角も昨夜云て／やつた様ニ手前ハ林を訪／て奴がDiableや殿ニ／對する考と西洋画と／日本画他ニそれとなく明治美／術會ニついての意見などを／聞ける丈聞て見ろ大ニ／参考ニ為るから林ハ／ど古までもアンチDiableニ違ひないので／Diableをへ古ますが実だ／ろう其れが為ニ其反對の／者を保護するのニ違い／ないオレなんかも今学校／ニ附属して居るから奴の大／目的を達する邪魔だ／と考たならやつゝけ／て仕舞ふだろう安伸の／心配ハ無限でハねへぞ／林の手下として博物館／や学校攻撃をやつて居／る奴等ハ誰れだか古れも／大村ニ序ニ聞て見ろDiable／の方でハ一生懸命ニふみ古たへる考らしい／一寸面白い戦ぢやねへか／オレなんかを大敵として居る／のハ云ハずと知れた明治美術／會だ古とニよつたら浅井も／小山も浅沼も小山も松井も長沼も皆挙げられ／て一時一寸盛な様な姿ニ為／るかも知れないが何しろ一時／少しの金に有りつく位の事で長／持ハしない事ハ分つて居る／林が策略上か又或ハ本気／で明治美術會ニ加勢を／して見た處で仕舞ニハあき／れ（マヽ）ら分つて居るよ　だから／オレなんかハ一層今度の／展覧會を立派にやつて／見せやうぢやないか先づ／今の處で手前やオレなんか／の取る可き策ハ戦の性質／と作戦計畫とをよく聞たゞ／して置て知らん面して她／強するのだ　此の手紙ニ書／たるハ仲間の者ニもだまつ／て居て呉れ其内ニ（二三日内ニ）逢／つて委しい話をする

三月十一日　　黒田

連へ

行事案内

7月 ⇨ 9月

7月	日	月	火	水	木	金	土
						1	2
	3	4	5	6	7	8	9
	10	11	12	13	14	15	16
	17	18	19	20	21	22	23
	24/31	25	26	27	28	29	30

8月	日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5	6
	7	8	9	10	11	12	13
	14	15	16	17	18	19	20
	21	22	23	24	25	26	27
	28	29	30	31			

9月	日	月	火	水	木	金	土
						1	2	3
	4	5	6	7	8	9	10
	11	12	13	14	15	16	17
	18	19	20	21	22	23	24
	25	26	27	28	29	30	

カレンダー内、□印は休館日

常設展

観覧料　大人200(150)　大学150(100)　※高校生以下は無料、(　)内20名以上団体

博物館

1号展
- 自然史 水の生きものたち ほか(II)　7/10

2号展
- 歴史・考古 長崎警備 ほか　7/10

3号展
- 歴史・考古 新 平成5年度 収蔵品展　7/10

大展
- 民俗 絵馬にみる農具 ほか　7/10

準備
- 7/15 自然史 昆虫の擬態 だましのテクニック ほか　8/28
- 7/15 考古 石器から鉄器へ 歴史 幕末佐賀の近代化　8/28
- 7/15 染色 はれの日の色 筒描き　8/28
- 7/15 民俗 絵馬にみる農具 ほか　8/28

準備
- 第4回 佐賀県美術展覧会　9/10～9/18

- 9/23 自然史 太古の巨木が教えること ほか
- 9/23 歴史・考古 佐賀藩の歴史 ほか
- 9/23～9/30 第44回 佐賀県児童生徒現場作品展

美術館

1号AB展
- 染色 有明の海　7/3
- 7/6 彫金 鉄のかたち 松尾忠次　8/31

準備
- 9/23 佐賀陶磁物語 鈴田照次 染色と工芸

2号展
- 第77回 佐賀美術協会展　～7/3(日)

準備
- 佐賀新聞創刊110周年記念 ―エロスと神話の世界― 古沢岩美展　大人・大学生800(700)　中高生500(400)　※(　)内は前売・団体料金　7/6(水)～7/24(日)

3号展
- 7/29 近代美術の人物画 8/21

準備
- 第11回 佐賀県写真協会展　7/27(水)～7/31(日)
- 第25回 独立CS展　8/2(火)～8/7(日)
- 第26回 佐賀県勤労者美術展　8/10(水)～8/14(日)
- 第14回 創元会佐賀県支部展　8/16(火)～8/21(日)

準備
- 第8回 日洋展 九州会場　大人700(600)　高大学生500(400)　小中生300(200)　※(　)内は前売・団体料金　8/24(水)～8/31(水)

4号展
- 第44回 佐賀県美術展覧会　大人200(150)　大学生100(70)　※高校生以下は無料　9/10(土)～9/18(日)
- 第6回 佐賀県高等学校総合文化祭 美術 工芸展　9/21(水)～9/25(日)
- 第6回 佐賀県高等学校総合文化祭 書道展　9/27(火)～10/2(日)

展覧会

枠内に明記する以外は無料

日誌

柚比本村遺跡出土・玉飾漆鞘速報展
平成6年5月21・22日　13：00～15：00　入館者数 2,281名

佐賀県博物館協会設立総会　平成6年5月9日
講演会「博物館相互の協力と運営」下川達彌氏（長崎県立美術博物館学芸課長）

佐賀県立博物館・美術館報　第106号　平成6年7月1日
編集発行　佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
〒840　佐賀市城内1-15-23　TEL0952・24・3947　FAX0952・25・7006
印　　刷　日之出印刷株式会社